

書評

竹内二士夫・粕谷大智・佐々木清子 著

図説 リウマチの物理療法—病院での治療から自宅療法まで

西條 一止 (筑波技術短期大学鍼灸学科教授)

リウマチとのつきあい方全てがわかる本
物理療法は、物理的エネルギーを治療に用いる療法です。その効果は2つに分けて考えられます。一つは物理的エネルギーの直接的効果で、温めて血液循環を良くし筋の過緊張を緩めることや関節を動かして関節機能を維持するなどです。他の一つは、体全体の働きを高める効果です。その人の体が、本来持っている治癒力、適応力などと呼ばれる力をよりよく発揮できる状態にすることです。体の内側から改善の可能性を大きくしようということです。慢性関節リウマチは、未だ治療法が解決していません。患者さんの生活全体を通じて改善の可能性を大きくすることが大切です。その点で本書はリウマチ治療の大きな力になります。

本書の特色

1) 読者対象：リウマチ治療は患者の生活全体を通じた治療計画が大切で、患者を中心としたチーム医療が効果を高めます。本書はその目的に添って、患者、その家族、リウマチ専門医や実地医家はもとより、リウマチ患者の診療に関わることの多い理学療法士、作業療法士、看護婦、ソーシャルワーカー、鍼灸・マッサージ師、保健婦など関係者全てを視野におき、それぞれに配慮した内容で書かれています。

2) 内容の特色：患者さんにも理解していただけるよう、わかりやすく、具体的、実践的です。リウマチは、病院における治療だけでなく、自宅にいるときも含めた生活全体の良好な管理が大切です。そういう意味で、患者、そしてその家族が専門的なことを十分に理解できることの意味は大きいのです。

医師、鍼灸・マッサージ師、看護婦など、それぞれの実務者が執筆しておられます。

物理療法をしてはいけない症状や状態(表2)には、「汗や水に濡れた皮膚部に超短波療法や極超短波療法をすると熱傷を起こすおそれがあるので注意が必要である。」など19項目が書かれています。また、RAの病期別治療計画では、早期の患者の手の治療として「筋力低下が過緊張筋の拮抗筋にあれば筋力増強」など記載は具体的です。

もう30年も前ですがRAの患者の灸療法をしていたときに、膝や足関節のお灸は夜行うのがよいと患者に教えられました。午前中に行くと足の調子がよいのでつい動き過ぎてしまい後で悪くなるといわれるのです。物理療法は、実際に行うなかでわかることが多いのです。物理療法を受けておられる患者の声もあつたらさらに良かったのではないのでしょうか。

このように本書は、その内容が具体的、実践的です。リウマチ体操もグループ分けし番号で整理され、一貫しており、カルテの記載、治療者、患者間などでの共通理解を進めるに力になると思います。実際に治療を行う場で必要な書として、主な重要事項は、見易いようにもう少し大きな活字で書かれていると使い易さがさらに良かったかと思います。

治療効果の評価法、RA患者に対する社会保障制度などもきちんと書かれています。タイトルに見合った完成度の高い本です。

(B5 頁128 本体3,500円+税 1998 医学書院刊)